

地域と学校 その12

地域の人々との温度差

いしくね
石榑小学校の新しい1年が始まりました。今年は新入生が39名でした。いなべ市は全学年40人学級のため、2年ぶりに1年生は1クラスです。他の学年で30人を超えるクラスはないので、1年い組には子どもたちがたくさんいるなあという印象を受けます。でもその分、隣の教室はぼっかり空いて寂しげです。さて今回の話題は、新しい校舎をどう使っていくかを考え、行動する管理運営委員会の様子です。

管理運営委員会の発足

前回(その11)ご紹介したように、新校舎を地域住民がどう使い、また管理するか、そして全体をいかに運営していくのかは、建設委員会の中に専門の委員会を設けて、体育館・プールの計画と並行して議論を進めていくことになりました。「管理運営委員会」と名付けられた委員会が発足し、9月に開催された第23回建設委員会で7名のメンバーが発表されました。やや堅い名称ですが、ミッションは新校舎を活用する方法の具体化と、地域の体制をつくっていくことから、建設委員長、校長先生、教育委員会など建設委員会の主要なメンバーが加わりました。その役割の重みが伝わってきます。

管理運営委員会は、しばらく建設委員会とは別の日に議論を重ね、その結果を建設委員会に報告しながら進めていきました。管理運営委員会事務局による議事録を見ると、「どんな利用がありそうか」「ボランティアの人材募集が必要」「事務的な対応をどうする」といった重要事項から、「喫茶コーナーのお茶はどう調達する?」「食事はいいけどお酒はだめだな」「おばあさんが朝市をやりたいと言ってきた」「金銭のやりとりがあるから難しいかも」「でも、もり立てようとしてくれることはうんと取り入れたい」といった記述が見られます。

朝市が開かれる学校、実現したらとても魅力的ですね。現在までのところ、朝市は開かれていませんが、校舎竣工後の夏のイベントでは、石榑で取れた野菜が販売されました。

10月末の第25回委員会では、「地域の人々の生き甲斐になるような人材バンクのような仕組みをつくりたい」とか「財源無しではなかなか事が進まないの、必要な資金を確保する方法も考えたい」という提案もされました。地域通貨やコミュニティファンドを導入したまちづくり先進地の動きに触発されたアイデアです。



・石榑の里まつり(2005年7月10日開催)
新校舎竣工後の夏のイベントでは、石榑で取れた野菜が販売されました。

小松 尚(名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

地域に呼びかけるための準備

年末になると、体育館・プールの計画もまとまり、いよいよ管理運営がメインテーマになってきました。年が明けて2004年1月の第27回建設委員会では、当時基礎工事が行われていた校舎工事の様子や今後の予定が説明されました。竣工まであと1年。新たな気持ちで管理運営の方法をじっくりと話し合いました。

また2月からは、石榑学区の各自治会に管理運営委員会のメンバーが出向いて、新校舎計画の内容や地域住民の利用や運営に関する意見聴取や話し合いを行うことになっていました。そのために「新校舎建設だより」と「学校施設案内」が準備されました。新校舎建設だよりは、いよいよ姿が見え始めた新校舎について紹介するもので、定期的に発行されました。一方、学校施設案内は、新しい石小で何ができるのかをイラストで伝えるパンフレットです。「畳の部屋ではのんびりしていたおじいさんと、休み時間に遊びに来た子どもたちが昔話などで交流できますよ」といった調子で、地域開放されるゾーンの部屋の使い方が具体的に説明されています。そして最後のページでは、地域主導のプログラムを企画したり、参加しませんかと呼びかけています。しかしこれには、「自然発生的には動かない。誰かが音頭をとる必要がある」という意見もありました。



・新校舎建設だよりNo1(2004年2月)
「どんな学校になるの?いつできるの?」「地域に開かれた学校ってなにができるの?」問いかけに答えるように、新しい学校の使い方を紹介しています。

管理運営委員と地域住民の温度差

このような資料を手にしながら、管理運営委員会のメンバーは石榑の各自治会へ説明に赴きました。しかしそこでメンバーが直面したのは、地域の人々との温度差でした。「セキ

ユリティは大丈夫か?」「不審者がいてもわからないのでは?」といった公開ワークショップでも議論的になった子どもの安全に関する不安が、まだ地域では解消されていませんでした。また、「事故があって責任を負うのでは利用できない」という消極的な意見もありました。「人集めには何かイベントをした方がよい」「フリーマーケットをしては」という意見も。さらに、こういう機会にはいろんな意見ももらうもので、校舎工事の苦情や要請もありました。その一方で、「子どもが入り浸りになって帰ってこなくなる」と心配する声も。でもそれは、建設委員会のメンバーにとっては「そんな学校にしたいかったんだよ」と言いたくなる声だったかもしれません。

私は説明会に同席したわけではありませんが、管理運営委員会の報告からその雰囲気はよくわかりました。マラソンで言えば、リードしている先頭のランナーと後方のランナーの距離が少し空いてしまった、ということでしょうか。

その報告を聞きながら、かつて、ある商店街の活性化に成功した理事長さんから聞いた話を思い出しました。それは…よそ者の自分や若手が商店街の活性化を目指しているいろんな事業を始めたのだが、古くから店を構える商店主が足を引っ張り、なかなか上手くいかなかった。それでも個性的なお祭りを続けていくうちにお客が増え、新しいお店ができ、商店街全体としても潤い始めた。すると、みんな黙ってついてくるようになった、と。この理事長曰く、どこでも先導する人、黙ってついてくる人、足を引っ張る人がいる。反対勢力を、積極的な協力をしなくても黙ってついてきてくれる人へと転換するまでが大変だった、という話でした。

自治会の説明会では、いろんなレベルの意見をもらい、少々落胆した委員もありました。でも私は、足を引っ張る意見がそんなになかったことに安心しました。もちろん、もう校舎が建ち始めている段階だったこともあるでしょう。また、そういう意見ももらった管理運営委員会のメンバーもしよげることなく、「セキュリティのことはきちんと説明しよう」「地域からの声を前向きにとらえ、対応しよう」といった方向へ動いていきました。

変更した管理区画の仕方

年度末の自治会説明も終わって、建設委員会は3年目に入り、新年度1回目の建設委員会(第32回)は6月に開催されました。年度が替わったことで委員の交代があり、新しい委員会メンバーが7名加わりました。校舎もこの頃2階まで建ち上がり、新校舎の大きさが確認できるようになっていました。

管理運営についても継続的に議論と検討が続いていましたが、この第32回建設委員会で大きな提案がありました。これまでは下階が特別教室や図書室を含む地域開放ゾーン、上階は教室ゾーンと分け、その間の階段を閉じることで時間外の利用範囲を管理しようとしていました。それを、地域開放ゾーンの喫茶コーナーと和室の間にスライドシャッターを設置し、学校の時間外は基本的にそこを閉めておくという形に変更しようというものです。これは、必要な時に管理範囲を区画できるようにしたい、オープンな図書室へ自由に出入りできることで、本の紛失を避けたい、最初から地域ゾーンすべてが使われることは想定しにくいので、小ホールや会議室だけ使えるような管理区域分けをしたい、という意図でした。

この日はいろんな意見が飛び交いました。「何で今になってそんな変更をするのか?」「いや、やっぱり最初から全部開放なんてできっこない」等々。私も正直残念でした。そうすることなら、その8でお話した公開ワークショップで提案した、個別の部屋に外からそれぞれ入るような方法をもっと強く主張していたらと少々後悔しました。

最終的には、常時閉めているのではなく、竣工後の様子を見て問題なければ開けておけばいいということで、その場は取りました。竣工を半年後に控え、夢が現実になってくる段階での逡巡の一つでした。



・取り付けられたスライディング・シャッター
工事中の対応で設置したシャッター。普段は開放されています。

いよいよ校舎竣工へ

校舎工事の方は、着々と進んでいきました。7月の建設委員会(第33回)では学校の先生も参加して工事見学を行いました。また、前回委員会後に地域運営スタッフを募集したところ、多数の申し込みがありました。そこで、11月末の建設委員会(第35回)では、管理運営委員会の中に企画、広報、環境、指導伝承の4つの部会が立ち上がり、その活動が紹介されました。

そして、2004年末に竣工する新校舎の完成式が新年1月10日(祝日)に開催されることが決まりました。子どもたちが使い始める前日に開催し、地域のみなさんにお披露目しようという企画です。また、この完成式は、教育委員会や学校主催ではなく、建設委員会および管理運営委員会が主催することも確認されました。



・校舎工事の現場見学(2004年7月)
先生方も参加した現場見学。躯体は完成しており、新校舎の使い方を想像しながらの見学でした。